

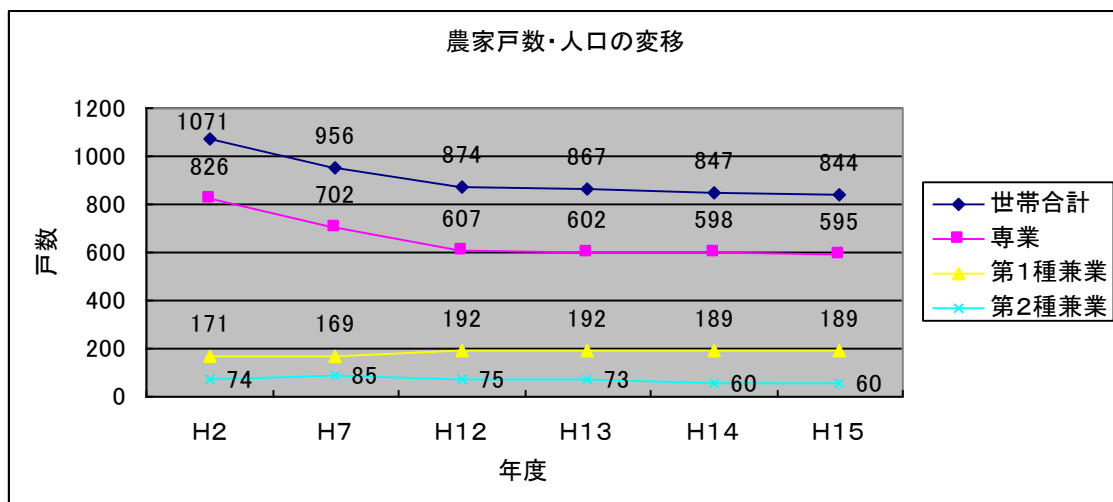
第3章 帯広の農業

福本 豊

3.1 各産業の概要

帯広の中心産業は農業であるが、第三次産業のサービス業や卸小売業も盛んである。農業は平坦な地形を利用して、小麦・てん菜(ビート)・馬鈴しょ・豆類の4作物を中心とした大規模畑作地帯である。また人口17万人都市でありながら農業従事者が3628人と高い数字を示している。ちなみに道内の10万人を超す都市と比較すると、札幌が3431人、旭川が4985人、釧路が416人、小樽が479人、北見が2115人であり、帯広の農業従事者数の高さが表れている。また農家1戸あたりの生産農業所得は1119.7万円である(2001年)。

工業は昔から食料品の加工などが中心であり、現在は製造品出荷額などで見ると食料品、木材・木製品、窯業・土製品の順となっている。全体としては1000億円をこえる程度の規模であるが、道内主要都市と比較すると、低い集積となっている。



出典：農林業センサス

3.2 農業

3.2.1 規模

帯広市は今現在大規模畑作地帯であるが、これは1957(昭和32)年に近隣の農村、大正村・川西村と合併した事により、十勝最大の農業地帯を形成するに至った。また現在の帯広市の農業1戸あたりの平均経営耕地面積は24.6haである。これは、全国都道府県の平均面積の20倍以上の広さである。ちなみに北海道全体の農業1戸あたりの平均経営耕地面積は17.4haである。平均耕地面積が大きいために大型機械を使った農作業が進められている。ここまで個人の経営面積が大きくなったのには、昭和40年代から始まった離農により、農家数が減っているにもかかわらず、昭和40年代以前の総面積を保ってきたため、個人への

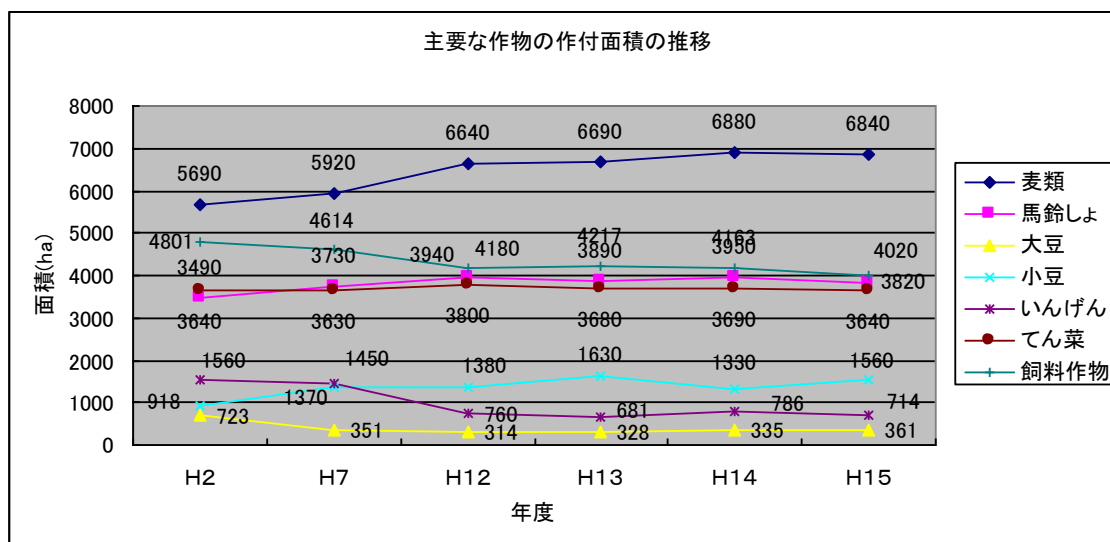
割り当てが増えてきているためである。

3.2.2 離農

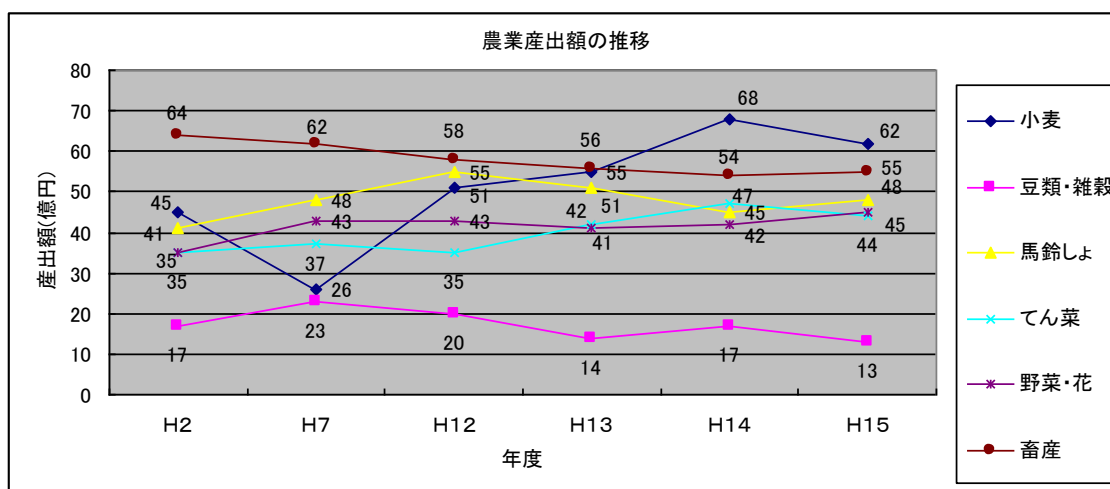
帯広市では、だいたい昭和 40 年付近より始まる。離農が始まった背景には、高度経済成長による農工間の所得水準などの格差の広がり、この広がりによる農業労働者の都市(企業)への移動。またオイルショックによる経済成長の停滞に伴い、起きた不況と物価高と農作物の価格維持があり、これらが離農を加速させた。

3.2.3 特色

農業産出額は全国 6 位、道内 1 位、中でも馬鈴しょの産出額は全国 1 位、豆類及び麦類は全国 2 位となっている。近年は野菜の作付けも増加し、なかでも長いものは産地を形成し全国各地や海外にも出荷している。これらの単位は市毎である。



出典：北海道農林水産統計年報



出典：北海道農林水産統計年報

麦類が増えているのは冷害などによる特に豆類の被害を避けるためではないだろうか(平成 5 年に大規模な冷害があった)。また、てん菜の作付面積が大幅に減少していないのは、農業技術の進歩により、毎年安定したてん菜が取れるようになった事により収入が安定している事が挙げられる。

帯広農業の特色はというと、十勝・帯広では耕地防風林により、独特な農村風景を形作っている。この耕地防風林とは風から農作物や畑を守るために畑の縁に列状に植えられた樹木である。通常、カラマツやシラカバなどが植木されている。そして、木の高さの数十倍の範囲で、風を防げると言われている。また「輪作」という特色もあり、このため、上空から見たパッチワーク状の畑の色取りは、年毎に変化に富み、風景を見せてくれる。



耕地防風林

3.2.4 施策

帯広市では今の帯広市自身に対して、多くの課題を与えている。

一つは、農村と都市住民との交流などをとおして、農業・農村のもつ国土保全や教育・レクリエーションなどの多面的な機能を幅広く理解してもらう必要がある事とし、これに応じて打ち出された施策は以下の通りである。

1) 農村文化の形成

- ・地域ぐるみの活動を促進しながら、特色ある食文化づくりや、生活文化の醸成をはかるとともに、個性あふれる都市との交流をすすめる。

2) 農村観光（グリーン・ツーリズム）の推進

- ・農業者自らが取り組むファームイン（農家民宿）などの体験・交流観光を支援するため、農家環境の整備を促進するとともに、コーディネート機能の充実をはかる。

主な施設

帯広市岩内自然の村：特色は美しい大自然の中で、野外活動や自炊などの共同生活を通して新しい経験を楽しみ、自然とふれあい、家族や仲間との心のふれあいを深められる。

帯広市八千代公共育成牧場：帯広市の西南、十勝ポロシリ岳のすそ野に広がる自然豊かな八千代牧場は、日高山脈をバックに、まるでヨーロッパのような風景が広がってる。総面積 976ha（東京ドーム約 210 倍）の土地に 1 年を

通じて乳牛が放牧、育成されている。体験学習、宿泊研修施設などもある。

3) 交流広場の整備

- ・先進的な農業技術や機械化システムの情報発信はもとより、地域内外の交流を促進するため、交流広場を整備する。

主な施設

帯広の森市民農園：全体面積 30000 m²、うち農園面積、23000 m²、最多区画面積 50 m²であり、たいてい 1 年 1 万円で借りられる。ただし市町村外の人は借りられない。

二つ目は、農業の国際化などに対して、関連産業との幅広い連携を進める必要があるとしている。これに応じて打ち出された施策は以下の通りである。

1) 産学官連携の推進

- ・産学官連携のもと、共同研究などを推進し、新しい技術の開発・導入を促進。
- ・大学、国立・道立試験研究機関などの研究成果を積極的に活用し、普及・促進。

2) 高収益作物の導入

- ・農業技術センターを核に、野菜などの高収益作物の導入を促進し、経営規模に応じた経営の多角化をすすめる。

3.3 農業を核とした産業連関

3.3.1 食品工業—お菓子

帯広の工業といえば、農業都市だけあって食料品などの農作物や乳製品を生かしたものなどが主流であり、また良質な小麦・乳牛を帯広近郊で取れるために帯広にはお菓子、ケーキがおいしいと評判であるお店が多い。その代表格に挙げられるのが、六花亭・柳月である。またこの 2 つの会社のほかにもグランベリー、高橋まんじゅう屋、ウェモンズハート、あまねこ、などおいしいと評判のお店は多い。各店の紹介は以下のとおりである。

六花亭：帯広に本社工場がある。そして全道に 55 の事業所をもっている。有名なお菓子は本店限定のサクサクパイ、ホワイトチョコ、マルセイバターサンド(六花亭といえばこれ)。このマルセイバターサンドは、十勝開拓の祖、依田勉三が率いる晩成社が十勝で最初に作ったバター「マルセイバタ」から由来している。

(本店 帯広市西 2 条南 9 丁目 6)

柳月：本社は帯広ではなく音更町だが本店は、帯広市にある。特に有名なお菓子は、お菓子の世界大会で最高賞の金賞を受賞した三方六(発売されて 30 年)である。また、きなごろも、十勝みるくも有名である。(本店 帯広市大通り南 8 丁目 15)



六花亭のマルセイバターサンド



柳月の三方六

グランベリー：スイートポテトが有名 本店 帯広市西 2 条南 6 丁目

高橋まんじゅう屋：大判焼の老舗 帯広市東 1 条南 5 丁目 1 9

ウェモンズハート：酪農家のアイス屋さん

あまねこ：独創的で個性的なケーキを作る。とてもアイディアが斬新である。

北海道帯広市西 20 条南 2 丁目 8-116 高館ビル 1FC



あまねこの個性的なケーキ

3.3.2 農作物加工

帯広では 3640ha(全国一位)の面積のビートが作られていて、234 千トンが収穫されているために、帯広市にもてん菜製糖の企業の工場があるというイメージが強いが、今はもう取り壊されて、十勝管内には、隣の芽室町と本別町にあるだけとなっている。しかし 1977 (昭和 52) 年までは帯広市にも日本甜菜製糖の製糖工場が置かれていた。この工場は、大正 8 年に日本甜菜の前身の北海道甜菜製糖が創立されたと同時に建てられた。



ビート資料館

それ以降十勝管内の製糖の中心として活躍したのである。しかし、芽室町に日本甜菜製糖のこの当時東洋一といわれるほどの最新の大型製糖工場が出来たために、帯広製糖工場は、老朽化していたために廃止されたのである。現在この跡地には、現在ビート資料館ができてい

る。
また、帯広には、かっぱえびせんやポテトチップスで有名なカルビーの子会社の「カルビーポテト」の本社と工場がある。この会社はカルビーの原料部門から 1980 年に独立して設立、今では道内各地に事業所・馬鈴しょ貯蔵庫を持っているが、工場は道内では、帯広だけである。この帯広の工場は、従来の消費地立地型工場ではなく、馬鈴薯産地立地型工場のモデルケースとして操業開始し始めた。ここでは、乾燥マッシュポテト・じゃがりこなどを製造している。

帯広市にあるわけではないが、河西郡更別村の神野でんぷん工場は有名である。ここで作られている「つぶつぶでんぷん」とは、日高山系からの伏流水で昔ながらの自然沈殿方法と低温長時間乾燥によって作られた大粒子の「でんぷん」(かたくり粉)である。保水性に優れ野菜等からにじみ出る水を吸収、保持し料理を形良く仕上げる。一般の片栗粉よりも少ない量で、和風洋風および中華のトロミやから揚げ、イモだんごに最適である。また、「つぶつぶでんぷん(かたくり粉)」は、よみうりテレビの、どっちの料理ショー(第 137 回)の「鶏の竜田揚げ」の衣として「本日の特選素材」に選ばれたほどである。



つぶつぶでんぷん

3.3.3 施策

工業の発展のために、帯広畜産大学に地域共同研究センターが設置されている。このセンターの役割は民間機関等との共同研究・受託研究の場の提供と推進、民間機関等からの研究開発等に係わる技術相談の窓口などである。また、共同研究内容は農畜産物の加工分野や農業・畜産機械分野である。また帯広市は地域の資源や技術、人材を有機的に結びつけながら、地場産業の振興を主体にした内発型の産業振興策を充実・強化する必要があるとしており、これに応じて打ち出された施策は以下の通りである。

産業クラスターの形成

- ・豊かな自然や安全・良質な農畜産物、先進的な技術を活用して、農業を核に、食品加工、木材加工、農業機械、住宅、流通・サービス、観光などの幅広い産業間で連携を深め、新たな産業群を育成し、十勝型の産業クラスターを形成する。

- ・地域の資源や特性、優位性を生かして、バイオ関連産業、環境産業、情報産業など新たな産業の集積・育成に取り組む。

参考文献・参照 HP

帯広市史 昭和 59 年・平成 15 年発行

帯広市 HP : <http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/>

柳月 HP : <http://www.ryugetsu.co.jp/pc/>

六花亭 HP : <http://www.rokkatei.co.jp/>

「何か探したい」第 8 弾 :

<http://www.t-base.ne.jp/~tokachisenior/tanken/031120/031120.htm>

あまねこ HP : <http://www.amaneko.com/mein.htm>

カルビーポテト HP : <http://www.calbee-potato.co.jp/cominfo/>

Alic 「今月の視点(2001 年 7 月)」 : http://sugar.lin.go.jp/japan/view/jv_0107b.htm#2